

要旨

「繰り返し」は様々な場面で観察される。本研究ではテレビ番組の情報提供場面をとりあげ、そこでゲストと進行役という役割を与えられた2人の発話に見られる「繰り返し」がどのような働きをしているかをみた。ゲストの「繰り返し」の特徴は主に自分の発話を繰り返すことで情報を分かりやすく提供するというもの、その出現が多ければ多いほど情報提供者としての役割が強くなる。進行役の「繰り返し」の特徴は主にゲストの発話を繰り返すことでゲストからより詳細な情報を引き出したり、話の確認をしたりしてゲストの情報提供を助ける。また「繰り返し」によってある話題を始めたり終わりにしたり、さらにゲストとの接触関係を保ち番組の円滑な進行をコントロールするというものである。会話の参加者に与えられた役割、文脈の違いによって様々な「繰り返し」の出現に違いがみられた。

【キーワード】ゲスト、進行役、他者の繰り返し、自己の繰り返し、機能

1. はじめに

文脈において既に出現した発話を繰り返すことはその会話で何らかの意味があるはずである。Tannen(1989)の研究は英語母語話者のあるパーティーでの親しい者同士の雑談という特定の文脈に絞った研究で、そこで見られた様々な「繰り返し」の機能や形状などについて記述されている。Nofsingerの研究は英語のテレビスタジオでのゲストと司会者の発話に観察される「繰り返し」の研究である。司会者が番組を円滑に運営する役割を遂行する際に見られる「繰り返し」をとりあげている。中田(1996)の研究は教室での教師の「繰り返し」に焦点を当てたもので、「繰り返し」は情報が確実に、分かりやすく伝える働きがあると述べられている。本研究では情報を提供を目的とするテレビ番組をとりあげ、そこで見られるゲスト(情報の提供者)と司会者的な番組の進行役の「繰り返し」に焦点を当てて研究を行う。進行役とゲストは視聴者(真の聞き手)に情報を提供するという共通の目的をもっている。両者はそれぞれ仕事として、ゲストは自分のもっている情報、専門知識を提供することを、進行役はゲストから情報を引き出したり、分かりやすく提供したりすること、また番組の進行を管理することを義務づけられている。また本研究で取り上げた3つの番組は番組の目的は基本的には情報を提

供することにあるが、各々少しずつ違った目的をもっている、その目的の違いがゲストと進行役の発話に見られる「繰り返し」にどのように現れているかを中田の機能分類の枠組みを用いて、見ていく。

2. 研究方法

一つの大きな話題について情報伝達が行われているタイプの異なる番組、さらに番組構成が確立されていて話題の提供者であるゲストと進行役である聞き手がいる番組からデータをとる。具体的には対談タイプとして「徹子の部屋」(40分x4)、実演タイプとして「3分クッキング」(7分x4)、講義タイプとして「今日の健康」(15分x4)を資料とする。

ここで扱う「繰り返し」は広くとらえ自分の発話の「繰り返し」と相手の発話の「繰り返し」を対象とした。形状も先行する発話をそのまま再現したものだけでなく、意味を保持した言い換えや要約も「繰り返し」とした。

ゲストと進行役という役割を与えられた参加者の発話にみられる「繰り返し」は会話の中でどのような働きをしているかを探るために中田(1992)の「繰り返し」の7分類の枠組みをもとに分析し、考察を加える。

- ① 関說的機能～対象を指示する機能。何かを述べたり情報をやりとりしたりするような伝達内容重視のコミュニケーションを助ける働き
- ② 心情的機能～会話における話者の心情や態度を表現する働き
- ③ 動能的機能～指示や説得のように会話の相手に直接的な影響を与える働き
- ④ 交話的機能～ことばのやりとりによる接触関係を保つ上での働き
- ⑤ 詩的機能～音やリズム、ことば遊びのような効果をあげる
- ⑥ メタ言語的機能～相手の言ったことばの意味を尋ねるなど、言語そのものについて言及する機能
- ⑦ 談話構成的機能～談話の構造指示や運営に関わる働き

3. 結果と考察

3. 1. 他者の繰り返し

ここではゲストと進行役にみられる「繰り返し」をみていく。表1は各番組に出現した「繰り返し」からゲストと進行役が用いた繰り返しの出現率を求めたものである。

表1 [他者の繰り返し]

番組のタイプ	対談タイプ		実演タイプ		講義タイプ	
	ゲスト	進行役	ゲスト	進行役	ゲスト	進行役
関說的機能	34	21	20	52	45	40
心情的機能	7	8	5	4	0	1
動能的機能	3	1	0	0	0	0
交話的機能	3	15	4	8	1	2
詩的機能	0	0	0	0	0	0
メタ言語的機能	1	1	0	0	0	0
談話構成的機能	0	7	0	7	0	11
	47	53	29	71	46	54
合計 %	100		100		100	

表2は関說的機能に出現した繰り返しを具体的な働きに基づいてを分類したものである。中田(1992)の分類に今回のデータでみられたものeとfを追加した。

表2 [関說的機能の下位分類]

番組名のタイプ	対談タイプ		実演タイプ		講義タイプ	
	ゲスト	進行役	ゲスト	進行役	ゲスト	進行役
a. 反復/連続的な事柄の描写	0	0	0	0	0	0
b. ポイントの強調、理解の徹底	4	3	5	15	3	6
c. 受信応答/確認/問い返し	40	20	15	26	46	38
受信応答	39	0	15	0	46	0
確認	1	8	0	16	0	26
問い返し	0	12	0	10	0	12
d. わきの聞き手への伝達、理解の補助	0	0	0	0	0	0
e. 話題の精緻化/展開	18	15	7	32	4	3
f. 理解の援助	0	0	0	0	0	0
	62	38	27	73	53	47
合計 %	100		100		100	

以下「対談タイプ」は「対談」、「実演タイプ」は「実演」、「講義タイプ」は「講義」として記述していく。

【3つの番組に共通点してみられる進行役/ゲストの特徴】

1) 7機能のうちゲスト、進行役ともに高い出現率を示したのは関說的機

能の「繰り返し」である。これは3つの番組が情報提供を目的としていること、また通常の会話とは異なりゲストと進行役が協力し視聴者に一定の時間内に一つの大きな話題を提供していることにより両者の「繰り返し」に他の機能よりも多く出現する結果となっている。具体的には『ポイントの強調、理解の徹底』、『受信応答／確認／問い返し』、『話題の精緻化／展開』において両者の繰り返しがみられるというのはお互い協力し、視聴者に内容を確実に提供することに努めていることが伺える。ゲストは『受信応答』、進行役は『確認／問い返し』の繰り返しを多く行っている。

例1]

1黒柳：私が持っていたあれは、胡弓は3本なんですけど、弓でこういうふううふうに弾くんですけどね。

2本城：あ、日本の。

3黒柳：あ、あれは日本のなんですか。

4本城：あれは日本で改良してこさえたものなんです。

ゲスト(2本城)の発話に対し、進行役(3黒柳)が問い返しし、それに対しゲスト(4本城)が応答している。

進行役にみられる繰り返しはゲストの発話から質問したり、確認したりすることにより、詳細な情報を引き出したり、理解を確実なものとしている。それに対してゲストの繰り返しは進行役の質問に答えたり、進行役の発話をもとに自分の話を展開するときに出現している。

2) ゲスト、進行役ともに交話的機能の「繰り返し」が出現している。

番組の会話の参加者は2人だけで、しかもその2人には仕事として会話を継続しなければならない。そのため必ず相手の発話を受けるがそのなかに繰り返しもみられる。

3) 進行役のみに談話構成的機能の「繰り返し」が見られる。

これは3つの番組とも決められた時間内に1つの大きな話題を視聴者に提供するものである。「対談」では番組の始めにゲスト紹介があり、それから対談形式で話が展開し、最後に進行役がゲストに感想をいったり、お礼をいったりして終了させるという流れがある。同様に「実演」は番組の始めに料理名と料理のポイントなどを簡単に告げ、番組進行中にそれらのことばが繰り返され、最後に進行役が料理名、材料と分量を読みあげながら簡単に手順を繰り返して終了するという流れがある。「講義」も始めに進行役がその日の話題、例えば「拒食症と過食症について」と述べ、問題

点を提示する。そしてゲストがその問題点を説明していき、最後に進行役が問題点の整理やゲスト（医師）が与えた注意や指示を述べる。番組の始めに述べた事柄や、番組の進行中に交わされた会話を繰り返して終了するということが数多くみられた。また大きな話題の中に関連する小話題があり、小話題の開始部分、あるいはその一部、またそれまでの会話をまとめとして終了部分で繰り返される現象がみられた。この機能の具体的な働きに『話題を呼び戻す』『談話におけるまとまりの収束の表示』の働きをするものがある。（Tannen 1989、中田 1992）「進行役の繰り返し」にはこの両者の「繰り返し」とも見られた。

例 2]

（今日の健康）

1黒柳：～どうして小さい小学生が三味線を弾いてみたいとお思いになったんですか。

2本城：そうですね。ギターをね、本当は弾きたかったみたいですね。

3黒柳：ええ。

4本城：それで地方だもんですから、ギターが、演奏する人が、趣味でもやっている人がいなかったみたいですよ。まわり見回して

5黒柳：ええ

6本城：それで三味線も糸がついているからいっしょかということで習ったんですけど。

7黒柳：本当はギターがやりたいのに、弦がついているから糸がついているから同じだから、近くにみんなやってんだからという話で。

進行役(1黒柳)の質問に対しゲスト(2本城)は答え、さらにそれについての話(4本城/6本城)が続けられた。ある程度のところで進行役(7黒柳)は今までの話をまとめ、終了している。

中田(1992)は岡本(1990)の「それまでの発話をまとめたり、既に出た話題を呼び戻すことは電話の終結部を示す」ことをとりあげ、この指摘が通常の会話における発話や話題のレベルの収束にも適用可能と述べている。またJohn Heritageはゲストの先行する発話をまとめて再提示することはインタビューアーの方策として話題をさらに発展させることになるかと述べている。

【3つの番組にみられる進行役/ゲストの相違点】

1) 「実演」の進行役で関說的機能の「繰り返し」が72%と高い出現率を示す。具体的にはどのような働きでみられるかをみってみる。進行役はゲスト

トの先行する発話を繰り返すことにより、料理の進行過程ごとに確認とゲストの情報を補足し、精緻化する行為を繰り返していることによる。

例 3]

1牧野 : そうしてここにですね。オイスターソースを隠し味に入れておきましょう。

2山王丸 : はい、大匙半分のオイスターソース、しっかりした味付けの漬けだれになるんですね。 (3分クッキング)

ゲストの「オイスターソース」に対し進行役が「大匙半分のオイスターソース」、「味」に対して「しっかりした味付け」というように情報を補足、精緻化する。これは進行役が番組でこのような役割を与えていることによると思われる。

2) 対談番組に交話的機能の「繰り返し」が多く見られる。

進行役に「他者の繰り返し」が多いのは交話的機能には「ことばのやりとりによる接触関係を保つ」働きがあり、沈黙が生じたり、話が滞ったりしないように相手の発話、またはその一部を繰り返すことにより、沈黙を埋めたり、相手にターンを渡すなどして番組を円滑に運ぶことに機能していることによる。「対談」に多いのはこの番組が他の番組と異なりあらかじめ情報の量やその番組のセグメントごとの情報の配分が厳密に決められていない、つまり番組全体のどの部分にどの話題をどれくらい提供するかが決められていないことによる。

一方「実演」は料理の進行過程ごとに提供される情報と情報量は必然的に決められているため、進行役には相手との接触関係を保つ努力はあまり必要とされていない。「講義」は、講義をするようにゲストが一方的に話す形式に近く、進行役はゲストの発話をまとめたりその話のポイントの指摘や確認、を規則的に行っていることから場面ごとの情報量はある程度決められているので、やはりこの機能の出現がほとんどみられない。進行役は「ええ」とか「はい」のような簡単な聞いている合図のみをゲストに送るだけで十分であり、いちいちゲストの発話を繰り返すことは「講義タイプ」の番組では逆に流れを遮る印象を与える。

これに対して「対談」では提供される情報がすべては事前に決められていないこと、会話の目的が気軽にゲストの話を楽しんでもらうことであり、しかもその情報を使って何かをするというような重要な情報も含まれていないことで、進行役は理解の徹底に努めるよりもゲストから滞りなく、で

きるだけ興味深い話を引き出すことに努めることに重きをおく。そこで進行役がゲストの発話の中で興味ある部分を繰り返すことはゲストに直接に質問するという働きかけではなく、間接的に話を引き出す働きかけになる。堀口も聞き手は話し手の発話の興味のある一部を繰り返す、それが成功すれば繰り返した事柄に関連したことを話し手は話すと述べている(1997)。ゲストに聞いている合図を送ることは重要である。その合図によりゲストは自分の話が相手に伝わっているか、またこのまま話を続けてい
いかわかるからである。Tannen (1986)はその聞いているという合図に「繰り返し」もよく使われていることを指摘している。進行役がゲストの発話の興味ある部分を繰り返すことは相手に情報を要求するメッセージとなるのである。

3) 「対談」は情動的機能の繰り返しが他より多くみられる。

情動的機能は会話における話し手の身上や態度を表出する機能であるから、情報提供番組としての共通点より番組のタイプの相違点がみられると思われる。つまり時事解説番組や講義タイプの学術番組では情動的機能は重視されないであろうが、ある個人のインタビュー番組や対談番組ではとりわけ重視されるのではないか。データを見ると「対談」がもっとも高い出現率を示し、さらにゲスト7%と進行役8%ともほぼ同率であった。これはこの番組では情動的機能が進行役とゲストにおいても必要な要素である。進行役がゲストの発話に賛同、共感し情動的なものを表出させ、さらにそれについて感想や意見を言うことは相手の気持ちを盛り上げ次の発話へと結びつく。

例 4] (寿の主人がビデオを一週間予約する話が展開中)

1黒柳：ご主人が、一週間先まで全部とれるようにして。

2寿：本当にまめな人です。

3黒柳：本当にまめ。

4寿：健康だからでしょうね。

これはゲスト(2寿)の発話に進行役(3黒柳)が共感を表し、それに対しゲスト(4寿)が話を続けている。このように進行役がゲストに共感や同意を示すことはゲストと一体感が生じ、話題が発展するきっかけともなる。

4) 「講義」の繰り返しが談話構成的機能に他の2つの番組より多い。

これは進行役がゲストの長めの発話を一定のまとまりごとに区切り、それまでのゲストの話のを要約するような作業を繰り返していたためである。

3. 2. 自己の繰り返し

Nofsingerの研究では自己の繰り返しは扱っていないが、本研究では自己の繰り返しも研究の対象として扱う。表3は「自己の繰り返し」を機能別に分けたものである。

表3 [自己の繰り返し]

番組のタイプ	対談タイプ		実演タイプ		講義タイプ	
	ゲスト	進行役	ゲスト	進行役	ゲスト	進行役
関說的機能	38	28	79	2	52	12
心情的機能	9	9	2	1	0	0
動能的機能	1	2	0	0	0	0
交話的機能	0	0	0	0	0	0
詩的機能	0	0	1	0	0	0
メタ言語的機能	2	4	5	0	23	6
談話構造的機能	4	3	10	0	5	2
	54	46	96	4	80	20
合計 %	100		100		100	

表4は関說的機能に出現した繰り返しを下位分類したものである。

表4 [関說的機能の下位分類]

番組のタイプ	対談タイプ		実演タイプ		講義タイプ	
	ゲスト	進行役	ゲスト	進行役	ゲスト	進行役
a. 反復/連続的な事柄の描写	4	1	0	0	1	0
b. ポイントの強調、理解の徹底	25	16	54	1	39	16
c. 受信応答・確認・問い返し	0	0	0	0	0	0
d. わきの聞き手への伝達、理解の補助	0	0	0	0	0	0
e. 話題の精緻化/展開	24	23	44	1	34	1
f. 理解の援助	5	2	0	0	8	1
	58	42	98	2	82	18
合計 %	100		100		100	

【3つの番組に共通点してみられる進行役/ゲストの特徴】

- 1) 「ゲストの繰り返し」は「自己の繰り返し」に高い出現率を示す。特に関說的機能に「繰り返し」が集中している。

これは3つのTV番組がある話題に関して一定時間内に情報を提供する番組であり、ゲストは主に情報提供の役割を担っているからである。具体的な働きをみると、『ポイントの強調/理解の徹底』、『話題の精緻化』に多く出現している。特にゲストの繰り返しに多く見られる。ゲストの提供する話題が継続中、または関連のある内容が話されていること、さらに確実に情報が伝わる努力がされていることが示される。進行役はゲストと比べると「自己の繰り返し」は出現は少ないが、進行役が繰り返す場合はゲストに問題点を指摘する際や自分の情報(知識、経験など)を提供する際に見られた。

2) 各番組のゲストと進行役にメタ言語的機能と談話構造的機能の「繰り返し」が見られる。

メタ言語的機能の「繰り返し」がゲストと進行役みられるのは両者が自分の発話を分かりやすく相手に伝えようと試み、ある表現や語彙を言い換えたりするためである。

談話構造的機能では進行役、ゲストとも自分の先行する発話と結びつけて話を展開したり、自分の先行する発話を繰り返すことでその話題を終わらせたりしたためである。

【3つの番組にみられる進行役/ゲストの相違点】

1) 関説的機能の「繰り返し」が実演タイプのゲストに著しく多く見られる。下位分類を見てみると、ゲストの「繰り返し」では『b.ポイントの強調/理解の徹底』『e.話題の精緻化/展開』に集中しているが、進行役にはほとんどみられない。これにより「実演」ではゲストは情報提供の役割に徹していることがわかり、進行役は聞くという役割に徹していると言えよう。「講義」はゲストの繰り返しでは「実演」と同様の現象がみられた。「対談」では進行役とゲストの「繰り返し」の違いは他の番組ほどみられない。具体的な働きでは『e.話題の精緻化/展開』の出現率を見るとほぼ同率であり、『b.ポイントの強調/理解の徹底』の出現も見られる。これは「対談」では進行役は他の番組とは異なり自分の意見を言ったり、進行役の情報(知識、体験)を提供することがあるためである。

2) 「講義」のゲストにメタ言語的機能の繰り返しが多く見られる。

これは扱われている情報があまり一般的なことではないことによる。ゲストが病気に関する日頃あまり馴染みがない難解な専門用語を用いたり、病

気の原因、症状、治療法などに関する説明した後言い換えをしているためである。

例 5]

松沢：抜き取って、で、それが今度はVLDLとかLDLにあるタンパクを通じて受け渡して、ちょうどパスする、あ、ラグビーでボールをパスするようにコレステロールをLDLに渡して、今度肝臓に運び戻すと、そういう働きをする。

例 5] のようにある物質の移動をわかりやすく説明するために「受け渡す」という意味内容を「パスする」、ラグビーにたとえて「パスする」、そして「渡して」とほぼ同義語にして何回か繰り返し、わかりやすく説明している。

3) 「対談」に情動的機能の「繰り返し」が最も多く見られる。

この番組ではゲスト、進行役が同率を示している。自分の発話のある部分に何らかの思い入れを持って話すことがこのタイプの番組では重要である。情動的なものを入れて話すことは、臨場感が生じ、聞き手を引き込む効果がある。この場合、ある種の音声や表情の変化を伴う場合が多い。

4) 「実演」に談話構成的機能の「繰り返し」が多く見られる。

ゲストは小話題（これから何をするか）を言い、またそれを繰り返してその話題を終了するという流れを繰り返しているため高い出現率を示している。「繰り返し」はある話題の終了を示すマーカとなっている。

3. 3. まとめ

ここでは進行役とゲストという観点でまとめる。

【進行役の繰り返し】

進行役の特徴は他者の繰り返しに顕著にみられた。

I. 関說的機能とおして見られる特徴

「他者の繰り返し」

- ①情報伝達の確実性を高める。
- ②ゲストに情報提供を促す。
- ④ゲストの話をも補足、強化する。

「自己の繰り返し」

- ①ゲストに何を話すかを分かりやすく指示する。
- ②自分に属する発話（知識、経験、意見など）をする際に相手に確実に

伝える。

II. 交話的機能とおして見られる特徴

- ① ゲストとの接触関係を保ち、番組を円滑に進める。
- ② 間接的にゲストの発話から話題の選択をする／円滑に相手から話を引き出す。（対談タイプに特にこの働きがみられた）

III. 心情的機能をとおして見られる特徴

- ① 間接的に話題の提供を促す。

IV. 談話構成的機能をとおして見られる特徴

- ① 話題を呼び起こし関連づけて理解を容易にさせる。
- ② 前に出た話を再提示することで次の話題へと移行させる。
- ③ 話題を終了させるマーカーとなる。

【 ゲストの繰り返し 】

ゲストの繰り返しの特徴は自己の繰り返しに顕著にみられた。

I. 関說的機能をとおして見られる特徴

自己の「繰り返し」の出現の割合が高ければ高いほどゲストは情報提供者としての役割が強い。

- ① 話題の継続、また話題と関連する事柄が話されていることを示す。
- ② 情報を確実に伝える働きをする。

II. メタ言語的機能をとおして見られる特徴

情報を提供する際にわかりやすく伝達する働きをする。（特に難解な内容を含んだ講義タイプにみられた。）

III. 談話構成的機能をとおして見られる特徴

- ① 関連づけて理解することを助ける。
「繰り返し」の前に「先程申しましたように」というような前置きが入ることがある。
- ② 話題終了のマーカーとなる。

IV. 心情的機能をとおして見られる特徴

臨場感を生じさせ、聞き手を話に引き込む。（特に対談タイプにみられた。）

3つの番組では進行役、ゲストのように与えられた役割、番組のタイプなど様々な要因によって「繰り返し」の機能の出現は異なる。

4. 今後の課題

本研究ではゲストと進行役にみられる「繰り返し」をとりあげた。「繰り返し」の出現は話し手が与えられた役割、会話が交わされる文脈によって違いがみられ、それによって様々な「繰り返し」の働きが観察された。また情報の重要性、種類や時間的制約など様々な要因が「繰り返し」の機能の出現に影響を与えていることがわかった。

今後の課題としては今回と異なる場面、例えば討論、授業場面などで、参加者も異なる場面の会話をとりあげ、そこに見られる「繰り返し」を分析し、「繰り返し」によって効果的な会話の方策を見出したい。

参考文献

- (1)岡本能里子(1990)「電話による会話終結の研究」『日本語教育』72号
- (2)尾崎明人(1993)「接触場面のストラテジー・聞き返しの発話交換をめぐって」『日本語教育』81号
- (3)中田智子(1992)「会話における方策としてのくり返し」
国立国語研究所報告13
- (4)----- (1996)「教師の発話におけるくり返し」『聴解過程の解明』
国立国語研究所」
- (5)堀口純子(1988)「コミュニケーションにおける聞き手の言語行動」
『日本語教育』64号
- (6)----- (1991)「上級日本語学習者の対話における聞き手としての
言語行動」 『日本語教育』71号
- (7)牧野成一(1980)『くりかえしの文法－日英比較対照－』大修館
- (8)Jakobson, R 川本茂雄他訳(1973)『一般言語学』みすず書房
- (9)John Heritage(1987) Analyzing News Interviews: Aspects of the
Production of Talk for an Overhearing Audience.
- (10)Robert, E Nofsinger(1994) Repetition in discourse interdisciplinary perspectives: Repetition in interactional: Repeating the host: An interactional use of Repetition by guests on televised episodes of computer chronicles.
- (11)Tannen, D(1989) Talking voices: Repetition, dialogue, and imagery in conversational, discourse. Cambridge University Press.

(言語文化研究所附属東京日本語学校)